be report

「古くて新しい」アナログ盤再評価

世界でアナログレコードが売れています。音楽不況が続く中で、ここ10年ほど、右肩上がりで数字を伸ばし続けている状況は、「もはや一過性のブームではない」とさえ言われています。デジタル世代の若者も買い、新鮮な気持ちで聴いているようです。いったい、アナログレコードの何が再評価されているのでしょうか。

続く「上昇トレンド」

一般ユーザーが音楽コンテンツを手に入れる手段には、コンパクトディスク（CD）などのパッケージメディアによる方法と、インターネットを通して有料配信を受ける方法がある。両者を合わせた世界の音楽売り上げは、国際レコード産業連盟（IFPI）の調べだと2014年は約137億ドル。前年より約1億ドル少なく、金額は、右肩下がりに減り続けている。その中でも、音楽配信の比率は年々増し、今やほぼ半分を占める。CDなどの比率は下がる一方だ。

しかし、アナログレコードだけは例外だ。音楽売り上げ全体の約2%を占めるに過ぎないニッチな市場だが、06年以降は右肩上がりで増え続け、14年は3億4700万ドルを売った。米国、ドイツ、英国など、売り上げ上位10カ国では、いずれも前年を3割以上も上回っている。世界4位の日本の14年の売り上げは1630万ドルと、前年比で約8割も増えている。

日本レコード協会（RIAJ）が調べた、アナログレコードの生産金額の推移を振り返る。過去にもダンスミュージックが流行した1990年代のクラブDJブームなどで、一時アナログレコードの生産が増えた時期があったが、99年をピークにその額は急落する。しかし、2010年に底を打った後は、再び上昇に転じた。13年は前年より金額が落ちているが、これは12年にビートルズのアルバムをまとめたLPボックスが発売されるなど、話題作のリリースが続いたため。14年の生産金額は、その12年の数字をも上回っており、上昇トレンドは続いている。

現在、国内でアナログレコードを量産できる設備が残っているのは東洋化成（東京都港区）1社だけ。同社レコード課の萩原直輝さん(25)によれば「連日フル稼働状態が続いていて、売り上げは5年前の約2倍に伸びた」という。また、レコード針（ダイヤモンド針）で8割近い世界シェアを持つナガオカ（山形県東根市）の、長岡香江取締役(42)は「この半年のレコード針の注文数は、昨年の数に迫る勢いで、生産が追いつかない」と話す。

CDプレーヤーが発売されたのは1982年。日本では86年にLPレコードとCDの生産枚数が逆転。アナログレコードは、過去の遺物となる運命だった。それが、CDも衰退しつつある今、なぜ盛り返しているのか。

「新鮮に感じる」若者

その復活には「レコード ストアデイ」というイベントも一役買っている。レコード店に客を呼び込もうと、毎年4月の第3土曜日に開催され、賛同するミュージシャンが用意した限定盤のアナログレコードが、参加店で一斉に売り出される。2008年に米国で始まった祭典は、今や世界21カ国に広がる。日本では「ミュージックソムリエ協会」というNPOの運営で12年に始まり、今年は約70のミュージシャンやバンドと、140を超えるレコード店が参加。デジタルで音楽を聴いて育った若者たちが参加店に足を運び、レコードやアナログプレーヤーを買い求めた。同協会の吉川さやかさん(49)は、近年の再評価について、「人々が、デジタルの音に疲れているからではないか」と見ている。

CDが登場した時、クリアな音やノイズの少なさ、取り扱いの簡単さなどが強調され、アナログより優れたメディアだという評価が広まった。しかし、「きちんとした機器で聴けば、アナログの方が音がいい」と主張する人々もいた。オーディオ評論家の和田博巳さん(67)は「アナログが劣っていたわけではない。むしろ、デジタルはアナログに限りなく近づこうと進歩し、まだ発展途上にある」と話す。

音の良しあしは個人の主観の問題だ。だが、アナログ派の人々は、CDの音に不自然さを感じていた。

人間の耳には20ヘルツ以上の音は聞き取れないとされていて、実はCDでは22ヘルツ以上の高周波はカットされている。しかし、実はこの取り除かれた高周波こそが、自然な響きや微妙な音色を醸し出し、人に心地良さを感じさせていることが、後の研究で明らかとなる。このためSACDやハイレゾなどの次世代デジタル規格では、高周波成分もカットせずに収められている。元来アナログレコードには、CDでは欠落している高周波成分がそのまま収められているため、再生音の響きは自然に感じられるのだ。

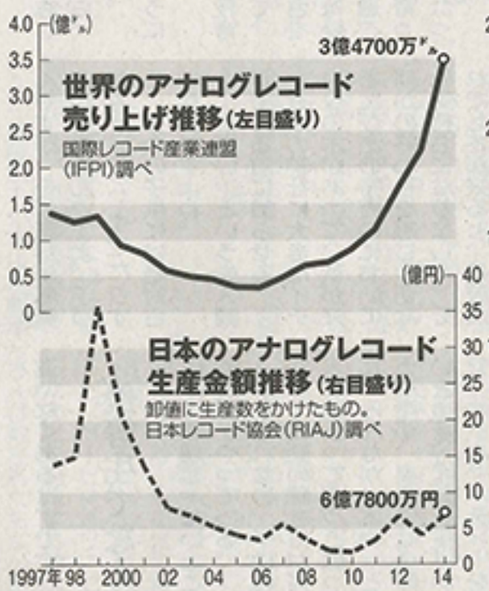
一般にスマートフォンなどで音楽を聴く場合、元のCDの音の情報は、さらに間引かれて記録される。だから、その再生音はより硬質な響きになりがちだ。デジタル機器の音に聴き疲れを覚える人がいるのは、そのためだ。

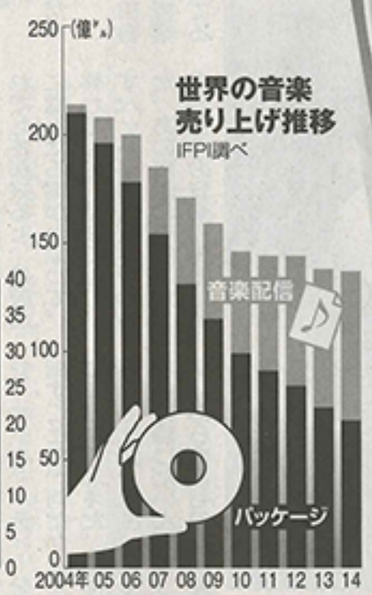
ラジオなどで世界の音楽を紹介しているピーター・バラカンさん(64)は、高級オーディオ関連のイベントなどで、デジタルとアナログの聴き比べ実験を行っている。すると、多くの参加者が、アナログの音の良さを再認識するという。「デジタルに比べてアナログは、音が生き生きとしていて温かみが感じられる。僕はアナログ世代だから、以前は過去の記憶がそう感じさせるのかもしれないと思っていた。でも、若い人でも色々と聞き比べてもらうと、9割方の人がアナログの音に軍配を上げますね」

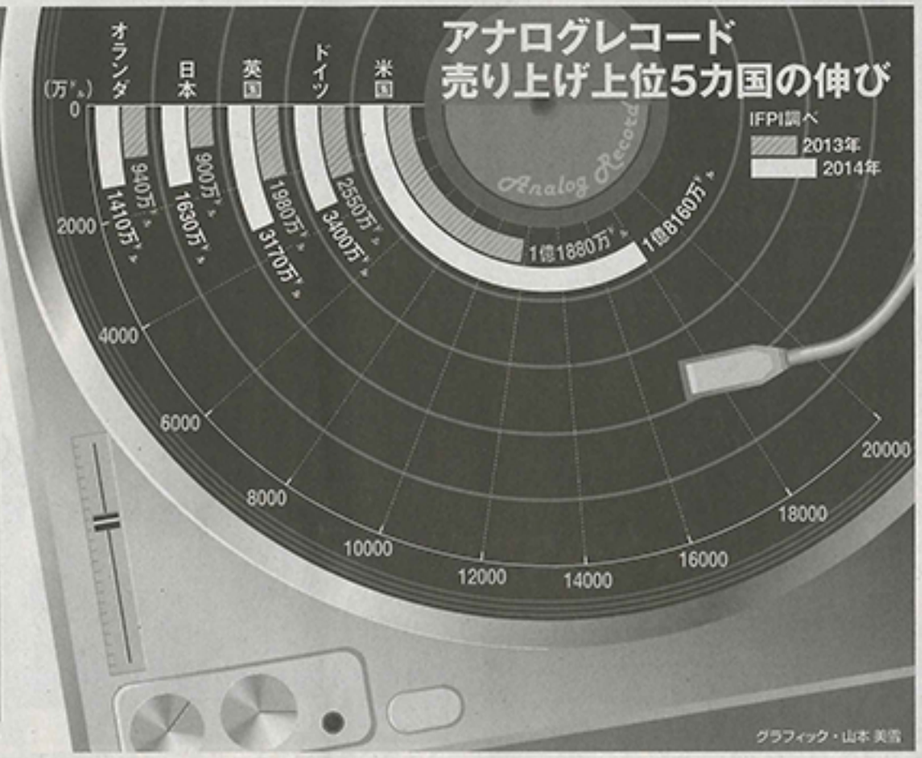
LPレコードのホコリをはらい、ターンテーブルに載せて回し、針を下ろす。リモコンのボタンひとつで簡単に曲を飛ばすことはできないから、レコードの片面二十数分を、ミュージシャンの意図した曲順で最後までじっくり付き合うことになる。デジタルな音楽を聴いて育った若者には、そんな営みが新鮮に感じられるらしい。彼らにとってアナログレコードは「古くて新しいメディア」なのだ。

（沢田歩）

世界でアナログレコード復活







グラフィック・山本美雪

参考情報　「レコード ストア デイ ジャパン」に参加したレコード店などの一覧は、公式ホームページ(http://www.recordstoreday.jp/)で。